

(参考資料)

**ジェロントロジーとは・・・  
東京大学高齢社会総合研究機構とは・・・**

Gerontology  
Gerontology

2009年9月



ニッセイ基礎研究所 ジェロントロジー・フォーラム  
東京大学高齢社会総合研究機構 (IOG)

# 1. ジェロントロジーとは・・・

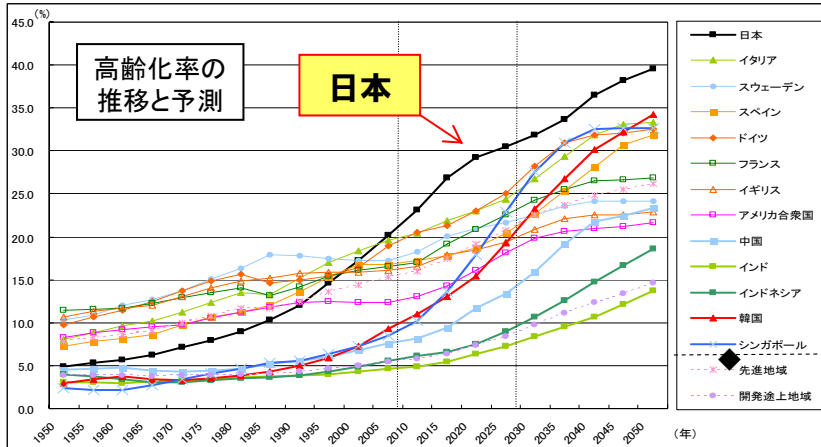
---

Gerontology  
**Gerontology**

# 1. ジェロントロジーが求められる背景

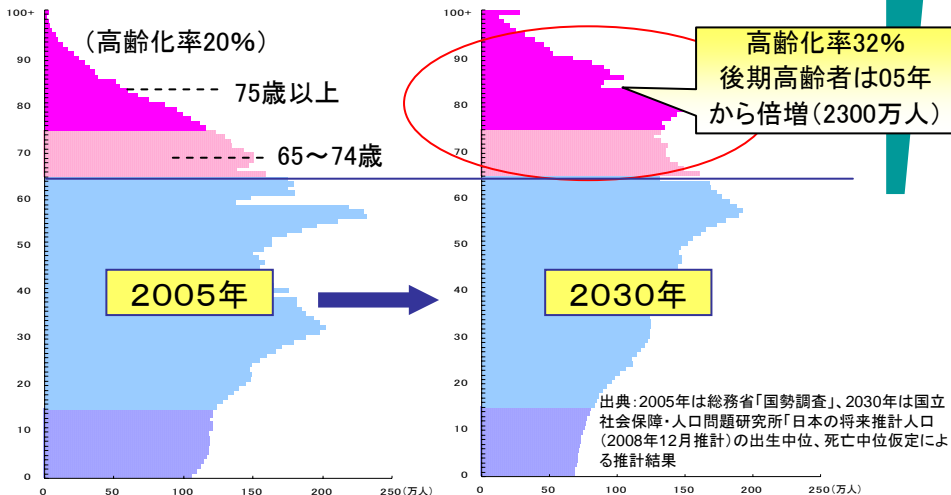
高齡化課題先進国⇒高齡化課題解決先進国へ ～課題を可能性に変えるジェロントロジー～

## 世界で高齡化の先頭を走る日本



出典: UN, World Population Prospects: The 2008 Revision, 日本は総務省「国勢調査」及び国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(2008年12月推計)の出生中位、死亡中位仮定による推計結果

## 2030年3人に1人は高齡者



## 今後の高齡化に伴い様々なことが不安視されている

- 社会保障費財政の急騰
- 労働力の減少
- 将来不安による消費低迷(資金のストック化→経済不活性化)
- 医療・介護の確保難
- 高齡者の閉じこもり、孤独死問題
- 高齡者事故・犯罪被害増加
- 地方の過疎化・治安悪化
- 高齡期の雇用問題(活躍場所・生きがいの確保)
- 長寿化リスク(生計維持)
- 老老介護、認知症の問題
- 終の棲家の確保 等

- 長寿は本来喜ばしいこと。悲観的に捉えがちな高齡化を希望の持てる姿に変えていくことが必要。
- そのためには「超高齡社会」に対応する社会システムの変革・創造が必要。
- 産業界にとっても、社会的課題の解決はビジネスチャンスでもある。
- 日本が超高齡社会に対応した国づくりに成功すれば、日本は世界の超高齡社会のモデルとなる。

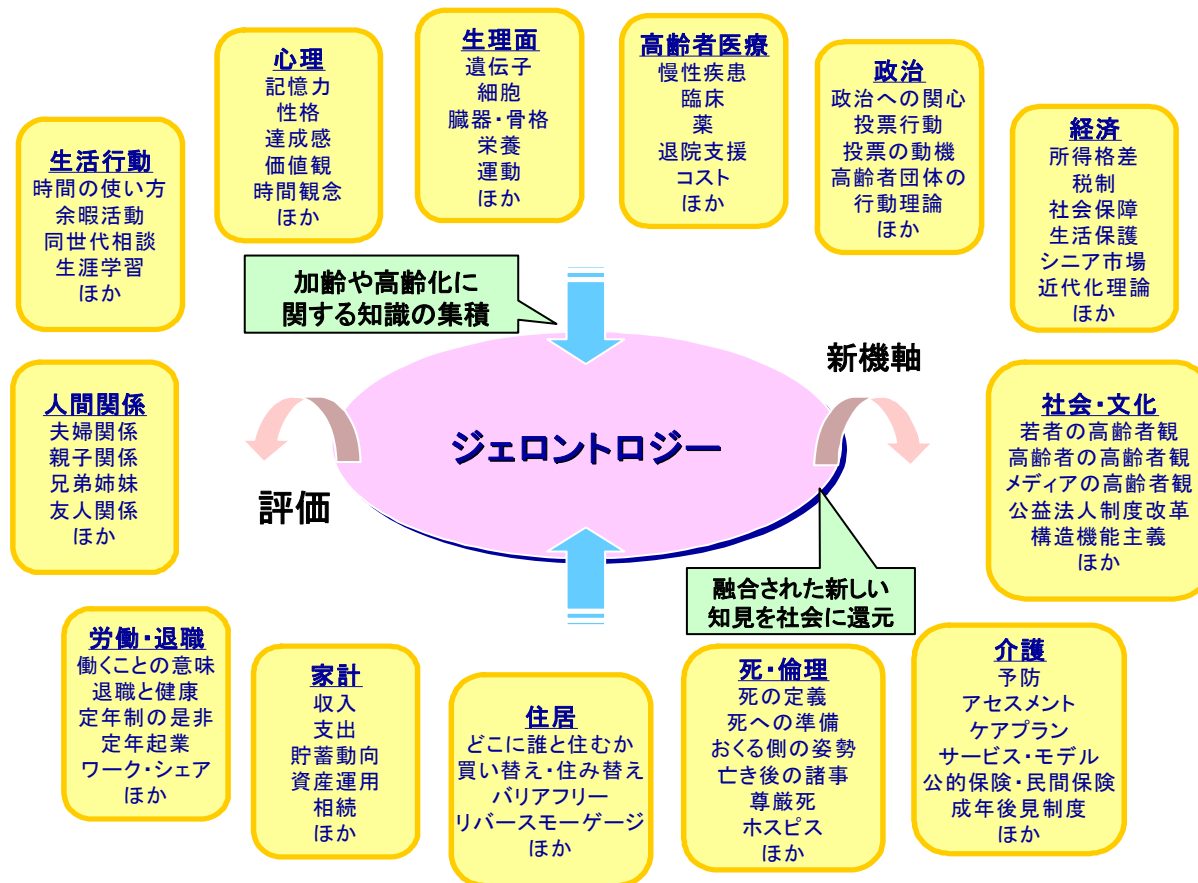
高齡化課題の解決・将来不安の払拭に向けて  
ジェロントロジー  
「いま期待が寄せられている  
世界最長寿国・高齡化先進国の日本だから」必要

# 2-①. ジェロントロジーとは(総論)

## 概要

- 「安心して活力ある長寿社会を実現する学際科学」
- 邦訳は「老年学・加齢学」など
- 学問の領域だけに止まらず、産官学民と連携しながら高齢化の課題解決に取り組む実学

## 研究イメージ



高齢化の問題は一つの領域だけで解決することはできない。高齢化・エイジングに関わるあらゆる領域の「知」を結集して、課題解決に臨むことがジェロントロジーの特徴であり醍醐味

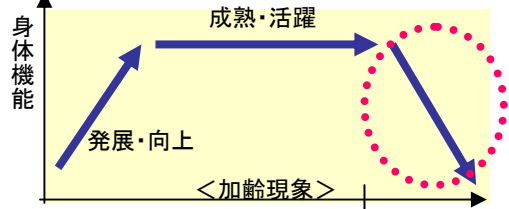
## 2-②. ジェロントロジーとは(特徴・効果イメージ)

ジェロントロジーの特徴  
そもそもその学問としての

これまでのエイジング(加齢)研究

『身体』としてのエイジング研究

○医学・生物学的視点が中心の加齢研究



⇒老化・機能低下が強調され、**高齢者=弱者**の印象・考え方が研究者に浸透

ジェロントロジーでは...

『人間』としてのエイジング研究

○QOL (Quality of Life) 向上の視点による加齢研究

生物学的視点

■ 身体の加齢変化

心理学的視点

■ 心と知能の加齢変化

QOL向上に向けた相関関係を研究

社会心理学的視点

■ 個人と周囲の関係

社会学的視点

■ 社会の高齢化の影響

高齢者の強み・弱みが明らかとなり、加齢を正しく理解することが可能に

高齢化に関する学際研究として発展

### ①より良い介護のあり方について

要介護者への対応

・家族任せの対応(介護保険導入前:措置対応)

×寝かせきりも当たり前

×慣れない施設での生活



×あくまで病人として、医療を中心に対応

ジェロントロジーでは...

○要介護者のQOL向上に向け、多面的なサポートの可能性を追究

本人・家族の心理を研究

介護ロボットの開発・導入

全人的なケア追究



予防・リハビリの効果検証

食事・栄養・口腔ケア

医師・看護師・介護士の連携

地域福祉政策

医学・看護学・介護学・工学・心理学・社会学・福祉学・行政学等、あらゆる分野が参加することで、要介護者及び家族のQOL向上

ジェロントロジーの効果  
事例イメージ①

## 2-②. ジェロントロジーとは(特徴・効果イメージ)

### ② 高齢者の就労問題について

#### 高齢者の就労環境

・定年制度の下、高齢になれば引退

× 働きたくても  
働く場がない  
(生きがい消失)



× 収入は減少  
これからの人生  
はまだまだ長い  
(将来不安)

× 高齢になれば能力が低下するという思い込み

#### ジェロントロジーでは...

○ 高齢期の活躍場所の拡大に向け、学際的視点からの研究・取組みを推進

年齢によらない  
本人の就労能  
力を適正に評価  
する手法の開発



地域社会の支え  
手としての高齢  
者の活躍場所・し  
くみを構築

高齢者の雇用機会拡大に向けた政策提言

医学・心理学・労働学・社会学・行政学等が参加することで年齢に対する偏見を科学的に払拭し、高齢者の活躍場所の拡大を実現

ジェロントロジーの効果  
事例イメージ②

### ③ 地域の安心・街づくりについて

#### 地域の安心・環境・街づくり

・生活者を基点とした街づくり・行政サービスが  
十分でない

× 独りで買物  
にも行けなくな  
ったら...



× 病院にも施設  
にも入れない

× 家族は遠く、近  
くに友人もない

× 最期まで自宅で暮らし続けられない現実

#### ジェロントロジーでは...

○ 最期まで安心してより豊かに自宅で暮らし続けられる地域を創造

24時間対応の  
在宅医療福祉  
制度の構築

遠隔医療の導入

住宅福祉政策  
地域全体のバリアフリー化



生活支援・見守  
り強化・移動サ  
ポート

地域交流促進



医学・看護学・心理学・社会学・工学・建築学・行政学等及び地域行政・産業界が参画することで、超高齢社会に相応しい地域創造を実現

ジェロントロジーの効果  
事例イメージ③

東京大学高齢社会総合研究機構で取組中(P10~11参照)

## 2-③. ジェロントロジーとは(歴史・ステータス)

### 世界の 歴史 ステータス

- 1930年代以降、米国で急速に発展
- 米国では現在300を越す大学・研究機関でジェロントロジーの教育と研究が行われている
- 国連からは「ジェロントロジーの教育研究の推進」を各国に勧告(1981年大会)
- 欧州でも各国共同での「ジェロントロジー教育プログラム(EuMag)」がスタート(2003年～)

### 日本の 現状

- H9(1997)厚生白書で「ジェロントロジー教育の必要性」が明記
  - 日本老年学会を中心とした学会活動は存在  
⇒社会的な認知度は極めて低い状況
- ▼
- 日本生命等の支援により「東京大学総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門」が誕生(2006年度～)
  - 2009年度より、「東京大学高齢社会総合研究機構;The Institute of Gerontology」に生まれ変わり、ジェロントロジー研究は本格化 ⇒社会の注目・期待の高まり





The Institute of Gerontology

## II. 東京大学高齢社会総合研究機構とは…

---

(=ジェロントロジーの具体研究活動紹介)



THE INSTITUTE OF GERONTOLOGY



# 1. 東京大学高齢社会総合研究機構とは

背景  
経緯  
(再掲)

2006-08年

東京大学総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門

日本生命他  
が設置

昇格

2009年～

東京大学高齢社会総合研究機構

東京大学の恒常的  
組織として設置



ジェロントロジーの目的である「**安心して活力ある豊かな超高齢社会の実現**」に向けて、行政(自治体)や企業とも連携をはかりながらジェロントロジー研究活動を推進する拠点

IOG機構の果す役割イメージ

ジェロントロジー研究

医学

心理学

社会学

経済学

政治学

⋮

あらゆる学問分野の知を結集  
|| 有機的に結びつける機能

研究成果の還元

行政(国・地方自治体)への政策提言

- ✓行政との共同体制による政策提言
- ✓新たな産業の創出
- ✓行政をベースとして、民間企業との連携を実施

行政(国・地方自治体)

IOG機構

企業

企業

企業

各企業への知見の還元

- ✓正しい高齢者観の提供
- ✓企業間での効果的な連携の実現

IOG機構

連携

企業

企業

企業

安心して活力ある豊かな超高齢社会の実現

## 2. 高齢社会総合研究機構を支えるメンバー・教授陣

11研究科・9センター等から東京大学を代表する中核メンバー66名が参画

### 東京大学 高齢社会総合研究機構

代表教授(専任)

**鎌田 実**  
(高齢社会総合研究機構 機構長)

**辻 哲夫**  
(高齢社会総合研究機構 教授)

**秋山 弘子**  
(高齢社会総合研究機構 特任教授)

運営委員 (21名)

大内 尉義 (運営委員長)	医学系研究科(生殖・発達・加齢医学専攻) 教授	清水 哲郎	人文社会系研究科(上廣死生学講座) 特任教授
甲斐 一郎	医学系研究科(健康科学・看護学専攻) 教授	吉川 泰弘	農学生命科学研究科(獣医学専攻) 教授
村嶋 幸代	医学系研究科(健康科学・看護学専攻) 教授	阿部 啓子	農学生命科学研究科(応用生命化学専攻) 教授
秋下 雅弘	医学系研究科(生殖・発達・加齢医学専攻) 准教授	岩本 康志	経済学研究科(現代経済専攻) 教授
樋口 範雄	法学政治学研究科(総合法政専攻) 教授	荒井 良雄	総合文化研究科(広域科学専攻) 教授
佐久間 一郎	工学系研究科(精密機械工学専攻) 教授	牧野 篤	教育学研究科(生涯学習基盤経営コース・ 教育行政学コース) 教授
大方 潤一郎	工学系研究科(都市工学専攻) 教授	稲葉 寿	数理科学研究科(数理科学専攻) 准教授
大月 敏雄	工学系研究科(建築学専攻) 准教授	飛原 英治	新領域創成科学研究科(人間環境学専攻) 教授
武川 正吾	人文社会系研究科(社会文化研究専攻) 教授	廣瀬 通孝	情報理工学系研究科(知能機械情報学専攻) 教授
白波瀬 佐和子	人文社会系研究科(社会文化研究専攻) 准教授	伊福部 達	先端科学技術研究センター(人間情報工学) 教授
		森田 朗	公共政策学連携研究部 兼 政策ビジョン研究センター 教授

その他関連教員(42名)

# 3-①. 具体研究事例: 東大-柏モデル地域創造プロジェクト(概要)

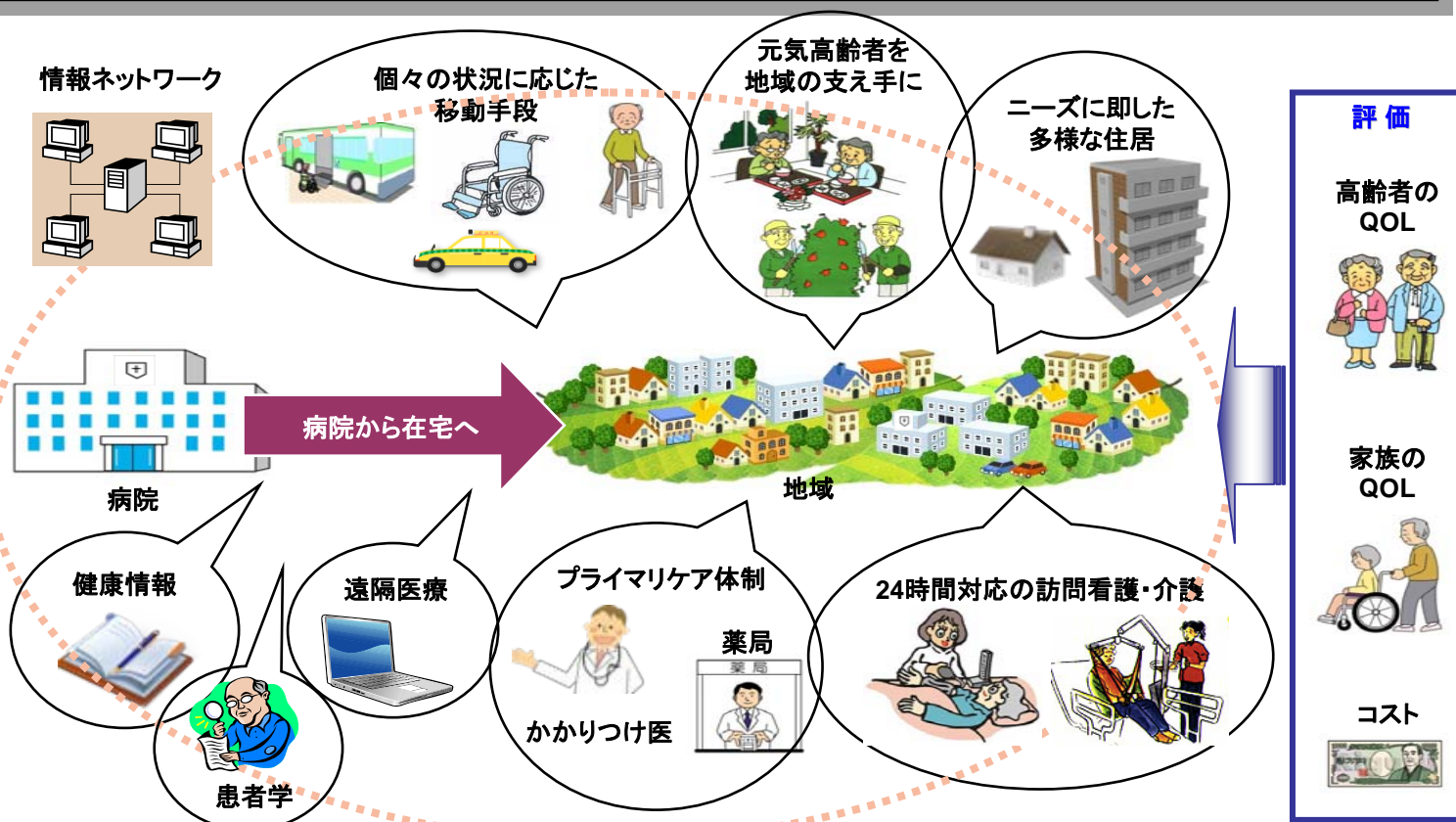
## 概要

- 東大-柏市-都市再生機構(UR)の共同事業(2009年度～)
- 柏市豊四季台団地及び周辺地域をフィールドに、超高齢社会対応のモデル地域開発に取り組む
- 住宅政策と連動した総合的な在宅医療福祉システムの導入と政策立案
- 移動、健康づくり、生きがい就労、見守り等、コミュニティ形成の手法提案
- Aging in Placeの視点に立った多次元評価尺度開発 等

## IOG 研究理念

|| 住み慣れた所で最期まで自分らしく  
老いることができる社会の実現

Aging in Place



# 3-②. 具体研究事例: 東大-柏モデル地域創造プロジェクト(補足)

## ～東大-柏モデルはどのような地域創造を目指しているのか～

①これからは病院や施設に必ず入所できるとは限らない⇒もともと多くの人は最期まで自宅で住み続けられることを望んでいる



(住民の声)

②しかしながら、自宅で最期まで暮し続けるためには現実的に課題・ニーズが多い



階段だけの団地は身体への負担が大きい

運転をあきらめ、さらに普段の移動も困難になったら買物も行けない(=生活できない)

医療・介護が必要になったら24時間対応できる機関が近くになくは困る  
また常に病院等と連絡とれるシステム的な対応も必要

一方で、元気なうちは地域で生き活きと楽しく豊かに過ごしたい  
働く場や交流する場がないのは悲しい

自治体に対してはバラバラとしたサービスや施策を講じるのではなく、全ての住民にとって安心と豊かさを提供する総合的な街づくりを進めて欲しい

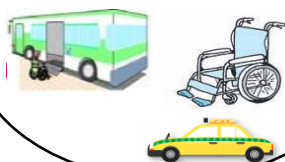
③そうした住民の声(課題・ニーズ)に応えるためには、自治体だけで対応することは困難で、関係する機関・サービス業者等が一体となって取り組む必要がある ⇒IOG機構は行政・関係機関を結びつける役割を果たすと同時に、全体の地域創造の設計図を描く

④住み慣れた所で最期まで安心して生き活きと暮していけるために、政策と連動した形で次のようなサービス・システムを構築する必要がある

ニーズに即した多様な住居の整備



個々の状況に応じた移動手段の開発・普及



遠隔医療の導入



情報ネットワーク

24時間対応の訪問看護・介護サービスの整備



生きがい就労づくり



高齢者等のQOL評価策定





## 4. ジェロントロジー・コンソーシアム【産業界との連携事業】

### 概要

- 東京大学(IOG機構)と産業界とのコンソーシアムを形成(2009年度～)  
⇒様々な業種から計35社が参加(2009.9現在)
- 合同研究会を継続開催(月1回)
  - －ジェロントロジー各分野の先端知識・技術を企業に提供
  - －「2030年の超高齢社会構想と産業界のロードマップ」を共同制作
- 最終的に、超高齢社会に必要な新たな産業(商品・サービス)の創成を目指す



## 5. その他 IOG機構ジェロントロジー活動

### 研究活動

#### ○福井県との共同研究

－高齢者の移動、レセプトデータ分析 他

#### ○医療介護総合研究拠点の設置(柏キャンパス) 他

### 教育活動

#### ○学部横断ジェロントロジー教育の継続 他

### 啓発活動 国際活動

#### ○日本・スウェーデン共同シンポジウムの開催(2009/10/7-9)

#### ○アジア・環太平洋ジェロントロジー研究者ネットワーク

#### ○IARU(International Alliance of Research Universities) 他

## <本資料に関する問合せ先>

**ニッセイ基礎研究所 ジェロントロジー・フォーラム**

**担当:前田**

**(東京大学高齢社会総合研究機構 客員研究員)**

**TEL : 03-3512-1815**

**Email: [maeda@nli-research.co.jp](mailto:maeda@nli-research.co.jp)**